

令和5年度四万十町教育研究所 第2回運営委員会会議録（要旨）

1 日 時 令和6年3月11日（月）15:00～16:30

2 場 所 四万十町農村環境改善センター 大会議室

3. 出席者

運営委員 徳弘 茂生 月原 賢司 前田 憲志（欠） 今津 等
榎野 一人（欠） 義村 貴明 石崎 豊史（欠） 戸田 晶秀
事務局 山脇 光章（教育長） 浜田 章克（教育次長） 長森 伸一（課長）
野村 泰子（所長） 武政 仁美（研究員） 齋藤 マサ（SSW）
小野川 恵利（SSW） 西田 香利（発達教育支援員）
榊山 雅子（支援センター指導員） 中平 均（支援センター指導員）
藤原 克彦（支援センター指導員） 中津 吉弘 国広 由香

4 傍聴者 0名

5 日 程

- (1) 教育長挨拶
- (2) 事業報告
- (3) 協議
 - ① 令和5年度の教育研究所活動内容について
 - ② 令和6年度に向けて
 - ③ その他

6 事業報告

- (1) 教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）
事務局より 資料（事業報告案）P1～P2 及びパワーポイントにて説明
- (2) 学校研究支援
 - ① Q-U・hyper-QU の取り組み
 - ② 「いのちの学習」の取り組み
 - ③ 校内研修支援
事務局より 資料P3～P5 及びパワーポイントにて説明
- (3) 教育支援センターの運営
事務局より 資料P6～P8 及びパワーポイントにて説明
- (4) 教育相談活動（SSW・発達教育支援員）
事務局より 資料P9～P12 にて説明
- (5) 研究協力校の取り組み

事務局より 資料P13～P15 及びパワーポイントにて説明

(6) 副読本「わたしたちのまち 四万十町」検証

事務局より 資料P16 にて説明

(7) 四万十教科書センターの運営

事務局より 資料P17 にて説明

(8) その他の取り組み

①研修会

②所内会・全体会

③教育研究所便り「しまんと」

④えんぴつの持ち方教室

事務局より 資料P18～21 及びパワーポイントにて説明

7 協議

(1) 令和5年度の教育研究所事業報告について【質疑】

浜田次長 : 西田さんに各校で子どもの訓練をしてもらっているが、1日1人につきどれくらいの時間行っているのか。

西田 ST : 窪川中では1時間の授業丸々なので50分。放課後の場合は約30分。

浜田次長 : 放課後に集中するから日程調整が難しいだろうと思う。

月原委員 : SSWは窪川地区と大正十和地区と分かれて2人で対応しているが、STは町内全域を1人でカバーしているので、ある程度地区で曜日を分けるなどした方が調整しやすいのではないか。

野村所長 : STの配置が今年からだったので、本年度は学校からの要望があれば受け入れてきた。来年度は窪川地域と大正十和地域で曜日を変えるなどして、移動時間をあまりかけず効果的に回れるような方法を考えていきたい。

戸田委員 : だんだん訓練の数が増えているのは、学校にも西田さんの存在が認識されて活用が広まっていると思う。多忙になって1名では足りないのでは。

教育長 : 本年度から西田さんに来ていただき、言語聴覚士の専門性と視点で実際に訓練を行ってもらっている。通常であれば保護者が放課後デイ等に子どもを連れて行っているが、四万十町は現場へ行ってもらっているので、保護者の負担も少なく有難いと思う。STを増やすかについてはまだ体制は整っていないが、今後検討していきたい。

戸田委員 : 四万十町の教育委員会は人の配置をよくしてくれる、高校まで支援員の配置をしてくれているという話を聞いた。

教育長 : そのような声をいただけるのは有難い。

浜田次長 : 副読本の改訂について、全体的に写真が古いようだが、大幅な写真の入れ替え等で編集委員会の回数が増えることはないか。

野村所長 : 前回の全面改訂からいうと、そんなに回数は多くならないと思う。どの写真や資料が古くなっているのかをピックアップして、各担当が持ち帰って現場で入れ替える

という作業になると思う。他には学校統合になることで、校区が広がるなどの変更は考えられるが、文言を変えたりはしない。

戸田委員 : 編集委員を早めに決めるといいと思う。

浜田次長 : 来年度の研究協力校は、また学校に手を挙げてもらう形か。なかなか学校の方からの希望はないようだが。

野村所長 : 大体小学校で1校、中学校で1校ということにしているが、中学校は3校しかないので、来年度は小学校2校になるのではないか。学校から手が挙がらない場合は、同じ学校が続いてやるのはあまりよくないので、最近してない学校にお願いしている。

教育長 : 教育委員会の事務局の予算としても校内研究支援というものはあるので、研究協力校としては、何かに特化して順番にやっていくなど今後検討していくといいのではないか。

徳弘会長 : 学校にとって負担にならないように配慮してもらえると、5万円という予算は有難い。タブレットの活用についてなど、ICT関連のことを一緒にやっていくのもいいのではないか。

戸田委員 : 支援センターの通室生が昨年と比べると半分ほどに減っているが、学校が抱え込んでいるというような子もいるのではないか。学校へ全然来ていない子は町内では何人ほどいるのかは把握しているか。

中津指導員 : 窪川中に関しては毎日朝とお昼に指導員が靴箱を見に行って上履きを確認することで欠席者の確認をしている。1、2年生の中で学年の後半になって欠席が多くなっている生徒がいる。新年度にどうなるか分からないが、対応しなければならない場合は中学校と連携して支援できる体制をつくっていききたい。

野村所長 : 町内で完全不登校は6名、不登校傾向の児童生徒は24人と把握している。傾向というのは1週間に1回は学校に来るなどしている子。SSWや保健師が家庭訪問したりしているが、会えないこともある。

榊山指導員 : 通室生が昨年より減ったのは、中学3年だった子が卒業したことと、通室生がほとんど学校復帰を果たして4月を迎えた。昨年かげつに来ていて学校へ行っていたがまた2学期から登校しなくなった生徒がいるので、何度か家庭訪問もし、かげつへ来るよう声をかけているが、なかなか一歩が踏み出せないでいる。不登校は早い時期に対応しないと長引いてしまう。SSWがかげつにつないだ生徒は、かげつで数週間過ごした後、順調に学校へ行くようになっている。支援センターは教育だけではなく生活の支援も行い、早い段階で手が打てるようにと考えている。

戸田委員 : 親、学校との信頼関係が必要だと思うので、連携を取ってほしい。

9ページの相談活動の中に昨年はあった巡回という項目がなくなっているのはなぜか。

斎藤SSW : 本年度は教育相談員が在籍しなくなったので、そのところは補導センターが担当している。

戸田委員 : 教育相談員がいなくなったことで、SSWが忙しくなっていないか。

斎藤 SSW : 不登校の問題もそうだが、家庭がベースになっていて、家庭環境が厳しい子が不登校傾向になると学習がしんどくなり、この2つが合わさることで不登校になってしまうことがある。家庭への働きかけがすごく難しいと実感しているので、その点では忙しくなったといえるかもしれない。

徳弘会長 : 昨年度から学校保健委員会と個別の支援会の両方に小野川 SSW と保健師さんにも入ってもらっている。そういった意味では会が増えて業務が大変になっていないか。

小野川 SSW : 会は増えたが、学校に声をかけてもらって学校の中に入って話を聞かせてもらえることは状況がよく分かるので、有難いと思っている。

徳弘会長 : 来年度に向けて研究所からお願いします。

野村所長 : 先程みなさんからいただいた意見をもとに、研究協力校のことや ST の学校での訓練についてなど検討していきたいと思っている。

徳弘会長 : 副読本の部分改訂についても、当初計画していたより会が多くなってしまうことがよくあるので、早めに着手して期限日までに終わらせることができればいい。

野村所長 : 来年度の早い時期に編集委員を決めて取り組んでいきたいと思っている。

月原委員 : QU、hyperQU についてのところで i-check とあったが、学調の期間だけでなく年間何回かやることができるのか。今やっている QU は、年間 2 回行い本校でも学期末にその結果を分析し、新学期にどういう対応がとれるかということを定期的に検証しているので、もし県版に合わせて i-check を年度末に行うということになれば、そのような検証がしっかりできなくなるのではないか。

研究員 : 今 i-check を実施しているいの町では、1 学期に 1 回目を行い、2 回目は県版の時期に合わせて行っていると聞いている。

徳弘会長 : 学校経営計画のスパンが 3 年間なので、i-check をやるとしたら、その先を見通して 4 年後にどうするかということを考えてもらえるといい。QU の数値は目標設定に入れられており、指標として使われている。ただ似たようなものは i-check にもあるので、予算のことと、時期的なことを踏まえて検討してもらえるといい。年度末にやっても学級経営の改善には活かしにくいので、今やっている QU の時期がよい。担任以外の違う視点からも子どもをみることができることもよいので、そのような効果についても考えてもらって検討してほしい。

徳弘会長 : よろしいですか。

(閉会)